

令和 6 年 9 月 9 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2020～2022

課題番号：20H01661

研究課題名（和文）離島の家庭におけるアロマザリングシステムの実態・世代間連鎖・時代推移

研究課題名（英文）The current status, intergenerational succession, and time transition of allomothering systems in remote island families

研究代表者

根ヶ山 光一（Negayama, Koichi）

早稲田大学・人間科学学術院・名誉教授

研究者番号：00112003

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 4,100,000円

研究成果の概要（和文）：守姉というアロマザリングが存在する多良間島の家族関係や地域関係とその変化を多面的に調べた。沖縄では家族のアロマザリングが活発であり、父親が育児に活発に参加すること、本土復帰以降父親が急速に家事育児を分担するように変化してきたことがわかった。また島を出た人へのインタビューからは、島への思いがアンビバレントであり、島の生活と子育てが本土の大きな影響下にあることが確認された。多良間島における近年の守姉の衰退は、本土復帰とその後の産業構造と働き方の変化、そしてそれを通じた島の家族と地域や学校の変化を反映していると考えられ、都市的環境が子育てに与える影響の大きさを示唆していた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

多良間島の守姉というアロマザリングは離島苦から生まれたもので、島民の相互扶助の一形態であり、結果として母子にほどよい隔たりを生むものであった。現状は守姉が衰退し、それといれかわるよう家庭での特に父親の関与が大きくなっていった。それを促進したのが本土復帰とそれともなう保育所の設置、核家族化などによる子育ての都市化であった。本研究で、本土復帰を含む70年に及ぶ島の家族の変化、家庭の内外の家族の現状、島外から見た島の評価などが多面的に検討できた。守姉というアロマザリングの変化と本土化・都市化との関連が明らかになったことは、都市部における子育ての功罪を考えるうえで示唆に富むものである。

研究成果の概要（英文）：This study investigated the family and community relationships and their changes in Tarama Island, where the allomothering by a young girl known as Moriane exists. It was found that family allomothering is active in Okinawa, and especially fathers are actively involved in child-rearing. Fathers have rapidly begun to share the housework and child-rearing responsibilities with their wives after the island's return to Japan in 1972. Interviews with people who have left the island also confirmed that their feelings about the island are ambivalent, and that island life and child-rearing are heavily influenced by the mainland. The recent decline of Moriane in Tarama Island is thought to reflect the changes in the island's industrial structure and working patterns following the return to Japan, and the resulting changes in the island's families, communities, and schools, which suggests the great impact that the urban environment has on child-rearing.

研究分野：発達行動学

キーワード：多良間島 アロマザリング 家庭 父親 本土復帰 守姉 都市部 地域

1. 研究開始当初の背景

(1) 母子関係の遠心性を、不適応ではなく適応行動として検討しようとする視点は、国内外を問わずきわめて少なかった。その中であって2000年以降文化人類学の分野で急速に注目されてきたのが、母親以外の者による母親行動すなわちアロマザリングである。研究代表者は過去20年にわたり、本研究課題の調査地である沖縄県の多良間島における子育てに注目して研究してきた。

2. 研究の目的

(1) 本研究は、母子遠心的な育児風土を特徴とする沖縄県多良間島の家庭における母親とアロマザー達(父親・祖父母・きょうだい)の育児連携、都市部と離島の子育ての対比、戦後の沖縄社会の激変にともない家庭での子育てがいかに変遷したかの検討を通じて、家庭内アロマザリングの不変構造と易変構造を考察するとともに、日本の子育ての過去・現在・未来を再考する試みである。以下個別の研究テーマ・担当者とその目的を示す。

(2) 研究1(多良間島と都市部の家庭内アロマザリングの質問紙研究(根ヶ山・小島))：家庭は母親に加えて父親、祖父母、きょうだいなど重要なアロマザーが複数同居する場であり、そこでは豊かなアロマザリングシステムが成立しうる。守姉という風習を生み、それを今日まで絶やさないで維持してきた多良間島の育児風土からすると、多良間島の家族アロマザリングシステムと都市部のそれとは何らかの違いが認められると考えられる。家庭には母親以外に、父親、祖母、姉というアロマザーが存在するが、それらの成員が母親と、またお互い同士、どのように連携して子育てしているか明らかにする。

(3) 研究2(高齢者の子育て体験のインタビュー等による研究(根ヶ山))：子育てには、父親、祖父母、きょうだいなどが連携して子どもを世帯するという家庭内における育児システムの横の繋がりと、「世代間連鎖」の軸というそれと直交する縦の繋がりとがある。家族内でのマザリングとアロマザリング連携の時間的変化は、地域の産業形態や女性の就労形態など社会的フレームワークの変化とも不可分である。島でのここ数十年にわたる子育ての変遷を生活スタイルの変化とともに、高齢者の口から直接聞き取り記録する。

(4) 研究3(島と本土の地域における観察研究(岸本))：多良間島では、母親だけでなく、多様な大人が乳幼児の養育に加わるアロマザリングが高頻度で見られるとされる。ただ、多良間島の乳幼児が母親、あるいは母親以外の大人からどの程度、世帯行動を受けているのか、そして、その量や質が日本の他の地域と異なっているのかについて定量的に検討した研究はほとんどない。そこで本研究では、まず関東地方に在住の1歳児をできるだけ長く観察し、1歳児がどのような他者からいかなる世帯行動を受けているのかを調べる。次に、多良間島に在住の1歳児も、同様の手続きによって観察し、乳幼児が世帯行動を受ける相手、その内容について調べ、関東と多良間島のデータを比較し、乳幼児の受ける世帯行動の違いを検討する。

(5) 研究4(子どもの仲間遊び関係の研究(小島))：兄弟による世帯や遊びが、家庭外でどの程度行われているかを明らかにするため、屋外での自然観察を実施する。

(6) 研究5(島外転出者へのインタビュー研究(宮内))：多良間島をはじめとした沖縄県の離島出身者は義務教育以降の教育機会を希望すると必ず離島を離れて生活しなければならない。この際の不安や喜び等の思いを理解し、その思いが離島を離れて生活するうちに、どのように変容していくかについて考察を深める。社会環境の変化を探るために、年齢が異なる二つのグループ(思春期の高校生グループと50代以上の多良間島出身者グループ)に対して、インタビュー調査を行う。

3. 研究の方法

(1) 研究1：質問紙調査により、沖縄・東京・埼玉・愛知の各地から、最年少の子どもが6歳以下の1206サンプルの回答を得た。おもな調査項目は、子育ての家族内分担の種類と頻度(離乳、共寝、共食、入浴、寝かしつけ、おむつかえ、散歩、食事、排泄、着替えなどの世帯の実態であった。

(2) 研究2：多良間島在住の90歳から32歳までの男女あわせて39名(平均59.4歳、大半は多良間島出身者)に、各自1~2時間の半構造化面接を行った。かつて子どもの頃に親からどのように育てられ、自分が産んだ子どもにどんな子育て

て・アロマザリングを与えたか、わが子がどんな孫育てをしたか、などを中心にインタビューし、特に父親と母親の家事・育児の分担の変化を分析した。

(3) **研究3**：まず、関東地方在住の1歳児3名の生活する家庭を訪問し、およそ10時から16時ごろまで、1歳児を対象とする個体追跡観察を実施した。観察にはビデオカメラ、および手書きのメモを使用した。次に、多良間島に在住の1歳児1名の生活する家庭を訪問し、関東地方の1歳児と同様の手法により観察を実施した。ただし、多良間島在住の1歳児では、9時より観察を開始し、昼食前の12時過ぎまでの観察となった。映像記録、および手書きメモによる記録から、1歳児が5分ごとに誰と一緒にいたか、どのような関わりかけを誰から受けたか、その他、1歳児の特徴的な行動を抽出した。

(4) **研究4**：多良間小学校前のグラウンド周辺において子どもの仲間遊び関係の自然観察を実施した。

(5) **研究5**：多良間島出身者を含む離島出身の高校生16名を対象に、離島での生活、離島を離れる際の不安や喜び等の思い、離島を離れてからの生活、現在の出身の島との関わりと思いについてインタビュー調査を行った。また50代以上の多良間島出身者6名に対して、多良間島での生活、多良間島を離れる際の不安や喜び等の思い、多良間島を離れてからの生活、現在の多良間島との関わりと思いについて、生活史に基づくインタビュー調査を行った。

4. 研究成果

(1) **研究1**：家庭において祖母、母親、父親、年上のきょうだい、それぞれどのような育児行動をどれくらい行っているかを因子分析し、9因子構造が得られた。着替え、排泄、寝かしつけ、入浴などの一般的な世話は、祖母・母親・父親・きょうだいともにそれぞれ単独で独立した因子を構成していた。おそらく一人でやること

が多いのであろう。ジェンダーの観点から興味深いのは、授乳と離乳食の世話、勉強と保育所送り迎えでは、それぞれ父母が同一の因子に含まれており、両親が連携して行っていることがうかがわれるものであったことである。どちらも比較的所要時間の大きな世話であり、そのことが父母間の連携を生んだと思われる。

(2) それぞれの因子得点を地域×年齢群の二要因分散分析により比べたところ、祖母によるケア一般(第1因子)の得点は沖縄に多く、沖縄における祖母の存在の大き

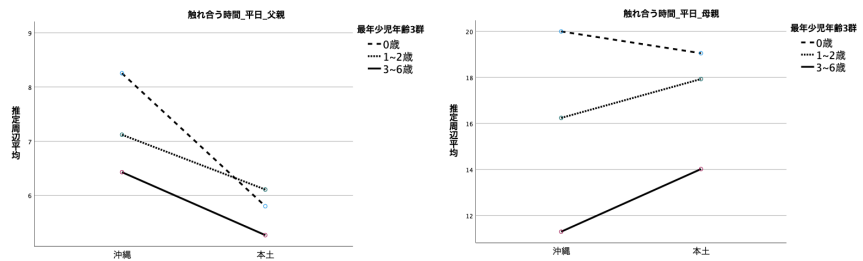


図1 平日父親(左)と母親(右)が子どもと触れ合う時間

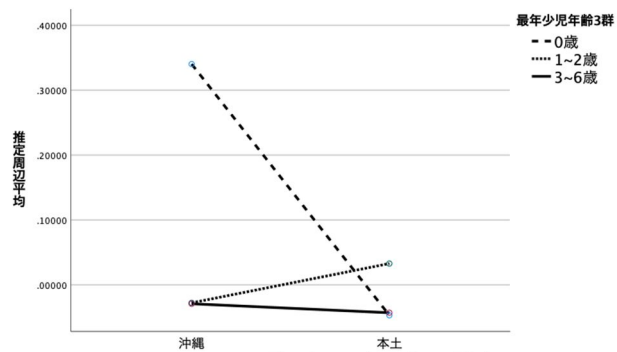


図2 兄弟による子どもの身の世話

表1 さまざまな年齢層における父親の家事育児分担。網掛けした部分は保育所がある状況下で子育てを行った世代であることを示す。

年齢	父親の分担	自分が子どもの時	自分自身の子育ての時	わが子の家庭
80代	ほぼ分担せず	5	5	1
	いくらか分担	0	0	1
	ほぼ対等に分担	0	0	2
70代	ほぼ分担せず	6	4	0
	いくらか分担	0	0	2
	ほぼ対等に分担	0	0	2
60代	ほぼ分担せず	9	8	1
	いくらか分担	0	2	1
	ほぼ対等に分担	2	1	5
50代	ほぼ分担せず	4	1	0
	いくらか分担	0	3	0
	ほぼ対等に分担	0	0	1
40代	ほぼ分担せず	6	3	
	いくらか分担	0	3	
	ほぼ対等に分担	2	1	
30代	ほぼ分担せず	3	1	
	いくらか分担	1	2	
	ほぼ対等に分担	1	1	

保育所世代

さが示されていた。他方、父親のケア一般(第2因子)には地域差はないが年齢で有意差があり、3歳以降に激減していた。一方、平日父親が子どもとふれ合う時間は沖縄の方が本土よりも多かったが、母親は逆に、平日に本土が沖縄を凌駕していた(図1)。

(3) また、兄弟が行う子どもの身の世話(第4因子)については、0歳児に関してのみ明瞭な地域差(沖縄>本土)がみられ(図2)、守姉と繋がる傾向として注目された。

(4) その他、夜間に子どもが誰と一緒に寝ていたかについて訊ねたところ、1~2歳時点で、本土と比べて沖縄の子どもたちに母親と一緒に寝ていない、という地域差が見られていた。以上のように、総じて沖縄の母親は子どもの世話に関して本土の各県の母親よりも積極性が低く、それは祖母、父親、年長のきょういという家族のアロマリングが盛んで

あることによって成り立っていた。家庭外での守姉やオバアのアロマザリングは、こういった家庭の特徴と関連するものであることが判明した。

(5) **研究2**：質問は多岐にわたっているが、語られた内容には一定の傾向が認められた。表1はその語りをもとに「本人の子ども時代に自分の父親が」「本人が結婚して子育てしていたときに自身が親として」「本人の子が結婚後親として」、それぞれ「父親が育児を分担しなかったか」「いくらか分担したか」「ほぼ対等に分担したか」に該当する回答者の人数を示したものである。網掛け部分は本土復帰直後に保育所が設置されてから子育てを行った世代である。

(6) 結果をみると、かつて家庭の家事・育児は、母親を中心としオバアや子どもたちで完全にカバーされていて、父親はまったく家事・育児に参加していなかったが、本土復帰後の保育所設置あたりを境にして、母親などと育児を分担するように変化していたことがわかる。

(7) 1972年に沖縄が本土に返還された。それにとまう沖縄振興開発計画によって 村立保育所が1979年に開設され、島のさまざまなインフラが整備されて、一気に生活スタイルが本土化し便利で快適になった。これによって守姉も変貌を遂げた。本土化は産業の二次三次化をすすめ、製糖や畜産などがさかんとなって生活の豊かさを生むとともに、人々が個人化してその反面人々のネットワークを薄めた。守姉の変化もその一環であると思われる。

(8) **研究3**：関東在住の1歳児では、主に養育に関わるのは母親であり、観察中のほとんどの時間、1歳児は母親と接触、あるいは近接の状態にあった。加えて、1歳児に年上のきょうだいがいる場合 (n=2) には、その年上のきょうだいもまた、1歳児と遊ぶ形でかかわっていた。それ以外の他者が乳幼児とかかわることは極めてまれであった。関東在住の3組で共通していたのは、昼食時に乳幼児が泣くこと、そしてそれが母親による食事介助のきっかけとなっていたことであった。一方で、年上のきょうだいのいる1歳児では、年上のきょうだいとのかかわりの際に泣くことが観察されなかった。つまり、母親に対しては泣くことでかかわりを求める場合があった一方で、年上のきょうだいに対してはそれが見られず、むしろ遊びの楽しい雰囲気によって、1歳児が年上のきょうだいとスムーズに関わることができていると考えられた。加えて、関東在住の1歳児では観察時間の大半を屋内で過ごしており (全観察時間に占める屋外で過ごす時間の割合の平均：4.77%)、外出の時間はとても短かった。

(9) 多良間島在住の1歳児では、母親や年上のきょうだいだけでなく、父親とも長く近接・接触していた。また、父親によるおむつ替えや抱っこといった養育行動も観察された。加えて、多良間島の1歳児では屋外で過ごす時間が長く (全観察時間に占める屋外で過ごす時間の割合：44.74%)、関東在住の1歳児のおよそ10倍であった (図3)。

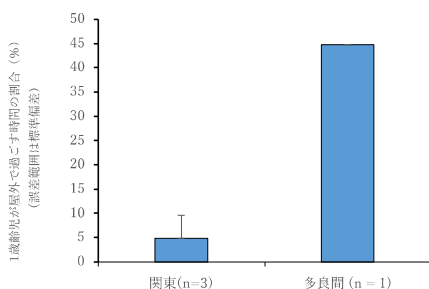


図3 1歳児が屋外で過ごす時間の割合

(10) 関東と多良間島、それぞれの1歳児に共通していたのは、1歳児に対し、母親や年上のきょうだいが近接・接触をしていたこと、そして、母親から世話行動を受けていたことであった。一方、両者で異なっていたのは、多良間島在住の1歳児で観察された母親以外の大人による世話行動が、関東在住の1歳児では観察されなかったこと、そして、関東在住の1歳児は屋内にいたことがほとんどであった一方、多良間島は多くの時間を屋外で過ごしていたことであった。

(11) 関東在住の1歳児を世話していた大人は母親1人であった。交通量も多く、また見知らぬ他者も少なからず存在する屋外は1歳児にとって危険な場所であり、1歳児やその年上のきょうだいとともに屋外に向かうとなると、母親は周囲の警戒に膨大な労力を割かねばならないと考えられる。こういった母親にとって、乳幼児たちに目の届く屋内は負担を感じることなく過ごせる環境であると考えられた。一方、母親と父親の2人の大人が世話行動に関与していた多良間島の場合、周囲の警戒を母親だけで担う必要がないために、1歳児とともに屋外へ繰り出すことが、関東在住の母親よりも容易であったと考えられる。これらの結果より、複数の大人が乳幼児の養育にかかわらない場合、「屋内」という環境が母親の育児負担の軽減に役立っていることが示唆された。本研究は大変、小さなサンプルサイズによる研究であるため、この結果が観察当日の天候や曜日といった交絡要因によるものである可能性は否めない。今後は、より多くの1歳児を対象とし、同様の観察を実施することで、本研究の結果の信頼性を確認する必要がある。

(12) **研究4**：グラウンドを含め集落の様々な場所で、子どもの仲間遊び集団の構成メンバーの記録を行った。就学前の子どもと学齢期、中学生までを含めた異年齢集団が多数みられ、その中にはきょうだい集団の核をなしているものがある。

つもみられた。この時間帯に限らず、きょうだいを中心に、そのきょうだい別のきょうだいと合流したり、きょうだいの一方と同学年の子どもと一緒に集まって遊んでいたりする姿が何度も観察された。そこで、以上の一日追跡観察とは別に行った仲間遊び集団のデータを分析し、同年齢からなる集団と異年齢からなる集団のそれぞれの数を集計した。異年齢集団の場合は、きょうだいが含まれているケースがどのくらいあるかも計算した(表2)。

表2 子ども集団のメンバー構

同年齢	異年齢		同定できず
	きょうだい含む	きょうだい含まない	
20	11	20	6

(13) 小島・根ヶ山(2022)を再分析した結果、同年齢集団に比べ、異年齢集団が圧倒的に多いこと、その中にはきょうだいを含む集団が半数程度含まれていることがわかった。都市部でも同様のデータを集めることが今後の課題だが、少なくとも多良間島では、きょうだい間の世話や遊びが盛んにみ

られ、それが対人関係のネットワークの広がり、複雑化に結びついている可能性が示唆された。

(14) 研究5: 離島出身の高校生たちへのインタビュー調査結果からは、故郷である離島に対してアンビバレントな思いを抱いている様子が垣間見えた。生まれ育った離島にいつかは戻る予定で自らの人生設計を考えている層と、生まれ育った離島には現時点で戻るつもりはないと考えている層に分けられ、後者においても、自らが有名になることによって、生まれ育った離島を有名にしたい、恩返しをしたいという思いを抱いていることなどがうかがえる。インタビュー調査の成人対象者は、現在首都圏内で安定した生活基盤を築き上げた方々であったので、多良間島に将来的に帰るといった計画はほとんどなかった。この方々が若い頃は、沖縄出身者に対する偏見が根強く、被差別体験もうかがった。現在は首都圏からの多良間島のための様々な支援をなさっておられる姿が理解できた。

(15) 多数の対象者に対する量的調査ではないので一般化することは難しいかもしれないが、両インタビューの結果を比較すると、大まかに共通するのは双方ともに生まれ育った離島に対する愛着である。思春期の高校生たちも、50代以上の多良間島出身者も、生まれ育った離島に帰るつもりで人生の計画を立てている人たちは当然だが、恐らく離島には帰らないという意志のもとに人生の計画を立てている人たちも、実際にそういう人生を送った人たちもまた、生まれ育った離島に対する恩返しを考えていることが興味深い。また、島を離れてから、都市部での生活を体験することの差異は、現在の高校生たちも50代以上の多良間島出身者も一様に指摘している。しかし、50代以上の多良間島出身者においては、「井の中の蛙状態だった」と表現されるように、現在の高校生たちとは社会環境がまったく異なる。ネット環境そのものがなかった状況においては、多良間の方言と都市部での言葉の違いに悩まされたことが話されている。現在の高校生たちはネット環境が十分に整い、島の外の言葉を都市部での生活で生まれて初めて聞くということはない。ところが、ダイレクトに無数の情報が入ってくる現在の2020年代の方が、離島の生活と都市部での生活の差異が少ないように一見考えられるが、過剰な情報に晒されているからこそ、現在の若者の方が離島と都市部の生活の違いをより一層理解し、故郷である離島に対してアンビバレントな思いを抱いている様も垣間見えた。

(16) 全体を通した考察: 結果には、守姉に繋がるような多良間島と都市部との根強いコントラストが、家族アロマザリングや地域コミュニティのあり方にもさまざまに見られていたと同時に、本土復帰以降の急激な変化も見て取ることができた。保育所が開設されたことや、島の二次産業化も手伝って、本土復帰後わずか半世紀の間に、島の生活スタイルが都市部のそれに近づいている。そして、それに伴い、オバアや守姉が担っていたアロマザリングが急速に衰退した。それらを象徴することとして、家庭における夫婦の対等意識が急速に増大し、家事・育児の平等化が進んだ。今後も変化をモニターし続ける必要がある。

(17) なお、本研究の実施は新型コロナウイルスのパンデミックの影響をまともに受けた。特に、島外から島に訪問することが沖縄県や多良間村から厳禁されたことは、島で現地調査するという本研究の骨格部分としていた本研究にとっては、いずれも致命的なことであった。そしてその事態は、繰越を二度にわたって行っても結局のところ大きく変わらなかった。それぞれの研究者はそういう困難の中で、針の穴に糸を通すような思いでなんとか曲がりなりにも成立させたということ、研究代表者として最後に付記しておきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 7件/うち国際共著 2件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Koichi Negayama, Jonathan T Delafield-Butt, Keiko Momose, Konomi Ishijima, Noriko Kawahara	4. 巻 12
2. 論文標題 Comparison of Japanese and Scottish Mother-Infant Intersubjectivity: Resonance of Timing, Anticipation, and Empathy During Feeding.	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Frontiers in psychology	6. 最初と最後の頁 724871
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3389/fpsyg.2021.724871	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 根ヶ山光一・河原紀子	4. 巻 17
2. 論文標題 保育園児の降園場面における行動：沖縄離島と関東都市部の比較	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 こども環境学研究	6. 最初と最後の頁 78 - 84
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 根ヶ山光一	4. 巻 17
2. 論文標題 保育園児の降園場面における行動：沖縄離島と関東都市部の比較	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 こども環境学研究	6. 最初と最後の頁 78 - 84
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Koichi Negayama, Jonathan T Delafield-Butt, Keiko Momose, Konomi Ishijima, Noriko Kawahara	4. 巻 12
2. 論文標題 Comparison of Japanese and Scottish Mother-Infant Intersubjectivity: Resonance of Timing, Anticipation, and Empathy During Feeding.	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Frontiers in psychology	6. 最初と最後の頁 724871-724871
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3389/fpsyg.2021.724871	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 根ヶ山光一	4. 巻 30
2. 論文標題 新型コロナウイルスパンデミック下の親子関係と医学的支援	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 乳幼児医学・心理学研究	6. 最初と最後の頁 67 - 76
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 根ヶ山光一	4. 巻 23
2. 論文標題 絆の音楽性：乳幼児と養育者のあわいにあるもの	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 臨床心理学	6. 最初と最後の頁 513 - 518
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 根ヶ山光一	4. 巻 32
2. 論文標題 日本における離乳指導と母親による選択の推移 (1997年-2017年)	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 乳幼児医学・心理学研究	6. 最初と最後の頁 51 - 62
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小島康生・根ヶ山光一	4. 巻 24
2. 論文標題 沖縄県多良間島における子どもの仲間集団の特徴 自然観察データに基づく検討	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 MERA人間・環境学会誌	6. 最初と最後の頁 1 - 8
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 根ヶ山光一
2. 発表標題 新型コロナウイルス流行下における親の子育て
3. 学会等名 日本乳幼児医学・心理学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 根ヶ山光一
2. 発表標題 日英の家庭における母子間距離の相互調節
3. 学会等名 日本乳幼児医学・心理学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 根ヶ山光一
2. 発表標題 日英の離乳食供給場面における母子の音楽性：両者の開口行動の同期から
3. 学会等名 日本発達心理学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 根ヶ山光一
2. 発表標題 保育園新規入園時の0歳児へのヒトとモノによるアロマザリング
3. 学会等名 日本乳幼児医学・心理学会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 根ヶ山光一
2. 発表標題 保育園児の事故傾向:小学生との比較から
3. 学会等名 日本乳幼児医学・心理学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 小島康生
2. 発表標題 屋外での自然観察から得られること
3. 学会等名 日本赤ちゃん学会第23回学術集会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 小島康生
2. 発表標題 多様な他者を巻き込んだ子育てのメリット
3. 学会等名 日本発達心理学会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 小島康生・根ヶ山光一
2. 発表標題 沖縄県多良間島の子どもによる生活空間の認知 写真を刺激に用いた調査から
3. 学会等名 日本発達心理学会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 岸本健
2. 発表標題 比較行動学から捉える乳幼児の発達と子育て
3. 学会等名 日本発達心理学会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 Koichi Negayama	4. 発行年 2022年
2. 出版社 Waseda University Press	5. 総ページ数 265
3. 書名 Parent-Infant Centrifugalism and Centripetalism Overcoming the Prison of 'Parenting'	

1. 著者名 根ヶ山光一・外山紀子	4. 発行年 2024年
2. 出版社 福村出版	5. 総ページ数 447
3. 書名 からだがかたどる発達：人・環境・時間のクロスモダリティ	

1. 著者名 根ヶ山光一	4. 発行年 2024年
2. 出版社 福村出版	5. 総ページ数 447
3. 書名 からだがかたどる発達 第1章第3節 からだと同期：離乳食場面における母親の共感的開口から	

1. 著者名 小島康生	4. 発行年 2024年
2. 出版社 福村出版	5. 総ページ数 447
3. 書名 からだがかたどる発達 第7章第1節 空間の広がり	

1. 著者名 岸本健	4. 発行年 2024年
2. 出版社 福村出版	5. 総ページ数 447
3. 書名 からだがかたどる発達 第3章第2節 コミュニケーション・指さし	

1. 著者名 根ヶ山光一	4. 発行年 2024年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 -
3. 書名 抱え込まない子育て：親子葛藤の発達行動学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	岸本 健 (Kishimoto Takeshi) (20550958)	聖心女子大学・現代教養学部・准教授 (32631)	
研究分担者	宮内 洋 (Miyouchi Hiroshi) (30337084)	群馬県立女子大学・文学部・教授 (22302)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	小島 康生 (Kojima Yasuo) (40322169)	中京大学・心理学部・教授 (33908)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関